

## 第二回 両親のこと

重複しますが、私は宇部高専第一期生(1967年卒)、機械工学科B組の猪腰 洋三(いのこし ひろみ)と言う者です。現在、カナダのバンクーバーと言う街に、約48年間住んでいます。多分、他の同窓生とは、随分と違った人生を歩んで来ましたので、昔を思い出しながら、履歴話として書きます。お時間がございましたら、拙い文章ですが、お付き合いをお願いします。

初めに、そもそも、どうして日本から海外へ出たいと思ったのか、その事から書きます。でもそれは、やはり、家庭環境が、大きく影響していたと思います。まずは両親の事です。父と母は、共に福島県の隣村同士で、今は郡山市になっていますが、父は農家の出身、母はお寺の娘でした。父が32歳、母が20歳の時、お見合い結婚をしました。で、笑い話だと思われるでしょうが、本人同士が初めて会ったのは、何と、結婚式の時だったとの事です。一応は、写真を見ていたと言っていました。昔の結婚は、お見合いが主流で、親が良いと言えば、それで決まってしまう選択の余地のないものでした。母は当時、一回りの年齢差にも反抗せず、それを当然の事として受け入れたとの事でした。そして、直ぐに両親は、当時の日本の国策に沿って満州へと渡ったのです。父からしますと、多分、満州に渡る前に身を固めたかっと思ひます。翌年、長兄が生まれ、今年80歳を迎えます。私には、満州生まれの兄が二人、姉が一人、そして、私と妹が日本生まれで5人兄弟です。幸いな事に現在もみんな健在です(2016年7月現在)。満州での父の仕事は、鉄工業を営み、満州人を雇って仕事を教え、工場は持たず、現場から、現場へと移動しながら下請けを束ねる仕事をしていたようです。それ故、父の仕事が、やがて私の仕事へと、つながって来たのだと思ひます。そして、海外に出て行く気質も私は父から受け継いだのでしょ。う。

さて、歴史的なお話ですが、両親が満州へ渡った年は、1935年でした。その頃、日本を取り巻くアジアの状況を見ますと、満州国建国がその3年前の1932年ですし、それこそ、福島の片田舎の農家の四男である父にとっては、新天地を切り開く事が出来るのは海外渡航だったのだと思ひます。

でも、父の話では、最初は、満州ではなく、アメリカへ行きたかったとの事です。しかしながら、当時、アメリカでは、アジア人排斥運動で日本からの移民は禁止されていたため、アメリカを断念して、満州へと渡ったとの事でした。また、父が農業から鉄工業に職替えしたのは、やはり、福島から東京へ出た時、生活のために、その頃、隆盛していた鉄工業の仕事を選んだことによるものだと思ひます。

さて、歴史のお話に戻りますが、1945年8月6日に広島、そして9日に長崎に原爆が投下されました。そして、その9日に、ソ連軍は日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、満州へと一気に侵入したのです。満州の日本人を守ると約束していた関東軍は、もぬけの殻です。そして、そこから、大変な事態になったのです。その時、父は43歳。最後の現地召集の一般兵として、3ヶ月前に軍に入隊して、家には31歳の母と9歳、7歳、そして2歳になる3人の子供達が残されたのです。詳しくは、話をしてくれませんでした。4人家族を守ってくれたのが満州人の張さんと言う人でした。彼は父の下で働く下請けのボスで、父から仕事を受け、張さん一族を束ねて一緒に仕事をしていたのです。その張さんが、父のいない時、無政府状態にある満州で、私の家族を匪賊から身体を張って守ってくれたのです。兄の話では、夜間、張

さんの若い部下達が大きな青龍刀を持って、家の外に立って見張っていたとのことでした。その頃の苦難の道は、山崎豊子の『大地の子』に詳しく描かれていますので、ここでは省きますが、ただ、父が部下として働いていた満州人を差別する事なく、人として接していたので、張さんは、自分の身体を張ってまでして、私達の家族を暴走化した匪賊から守ってくれたのだと思います。それは、父のお陰だと思います。父の満州人に対する愛がなければ、どうなっていたかと、想像するだけで恐ろしく感じます。そして、1946年、終戦から約一年後、アメリカが提供した引揚げ船で私達は、日本へ戻れたのです。その船上で、船酔いからでしょうか、私は2ヶ月早く未熟児として生まれたのです。

父は引き上げた後、2年間は福島の実家で農業を手伝い、その後、元の会社から呼び出され、小倉へと移りました。その事から、小倉が私のふるさととなったのです。

その頃の小倉は、隣に八幡製鉄所があり、とても活気に満ちた日本の四大工業地帯の一つでした。

小学校は、西小倉小学校へ通いました。でも4年生になった時、下級生の生徒数が爆発的に増え、教室が足りなくなったため、4年生だけが分校に通う事になりました。その頃、小倉には進駐軍がいて、多くのアメリカ兵がいました。昭和31年(1956年)頃のお話です。分校になった校舎は小倉城の近くにあり、石造りで、頑丈な建物でした。聞くところによると、それは、旧日本軍の陸軍の兵舎で、戦後、進駐軍が接收して軍関係の家族がそこに住んでいたのです。そこで、私は貴重な体験をしたのです。校舎は二階建てで広々としていたことを覚えています。私は、校庭にある花壇の花の世話をする係でした。勿論私だけではなく、数人選ばれたので、遊びながら花の世話が出来る気楽な係でした。

校庭の花壇の向こうには同じような建物が建っていて、仕切りとして、太い金網の高いネットフェンスがありました。ネットなので、向こうへ行く事は出来ませんが、向こうに住んでいるアメリカ人を見る事は出来ました。ある日の事、数人で花壇を世話していた所に、何と、二人のアメリカ人の女の子が花を見に近づいて来たのです。向こうは、日本語は出来ません。こちらは、英語はダメです。でも、花を見ながら、二人の女の子が自分の顔を指差して、名前を言うのです。ですから、こちらもそれに答えて、一人一人、自分の顔を指差して名前を言いました。そして、友達の荒木君が、得意顔で『アラキ、アラキ』と名乗ったのです。でも、返って来た言葉は、何と『アンギラス』でした。アンギラスとは、当時映画に出て来る怪獣の名前だったのです。それを聞いてみんなで腹を抱えて笑いました。でもその時、何だか、アメリカが自分の心に、身近に感じるのを覚えたのです。また、荒木君は、その後、荒木君と呼ばれず、みんなから、アンギラス、アンギラスと呼ばれる事になったのです。

そんなこともあり、金網越しにアメリカ人の生活を見ていて、どうして向こうはあんなにお金持ちなのかと、不思議に思いました。庭には青い芝生があり、デッカイ車、午後からは、野球を楽しんでいました。それに比べて、日本人の生活は、物凄く貧しいものでした。そして、その疑問から大人になったら、いつか、アメリカという国に行き、自分の目でどうしてアメリカが豊かなのかを見たいという気持ちになりました。

どこが、どう違うから、あんなにお金持ちなのか、その秘密を自分で発見したいという気持ちが湧いて来たのです。また、その頃の学校給食には、脱脂粉乳、つまり、スキムミルクがアメリカからの援助でありました。でもそれは、あまり美味しいとは言えない味でした。また、給食はいつもパンが主食でした。で、その頃から、漠然とアメリカという国は、どんな国だろうと一人で夢想するようになりました。

その後、中学校へと進み、地理の時間にアメリカの広さを知り、日本と比較して何と凄い国かと驚きまし

た。世界第一の国、アメリカ、ヤツパリ、いつか自分で行って本当の姿を見たいという気持ちが、ドンドンと膨らんで行ったのです。ですから、結局、外国に行きたいと思った理由は、単純な好奇心から発したのだと思います。で、その夢に見ていたアメリカ行きを、変更して、カナダ行へと変わったという訳です。



上の地図はカナダで見た世界地図です。太平洋が真ん中ではなく、大西洋が真ん中でした。初め見た時、エエーッ！と、驚きました。何故なら、こんな地図、日本では見た事がなかったからです。

-- 次回へ --